

# 「はじめて色覚にであう学習」…ほけん室から ～差別をつくらないために～

大分県 臼杵市立野津小学校 城 美穂

## 1. これまでの少数色覚\*の子どもとの出会い（「児童生徒の健康診断マニュアル」をもとに）

- 1995年『平成7年3月版』
- 2006年『平成18年3月版』
- 2015年『平成27年8月改訂版』（「児童生徒などの健康診断マニュアル」）

\*医学用語である「色覚異常」を、私たちは人権尊重の視点から「少数色覚」と称している。

## 2. 学習の機会を得て、しきかく学習カラーメイトに参加する

- 2016（平成28）年4月 大分県人教オープン講座「今が旬（？）色覚検査の話」に参加  
「色覚」知ってますか○×クイズの10問中5問が不正解で理解不足、学習不足を反省
- 同年8月 臼杵市教育研究協議会学校保健部会で色覚についての学習の場をつくる
- 同年「しきかく学習カラーメイト」が発足、マンガ「はじめて色覚にであう本」（以下『出会う本』）の作成に参加  
集まりの中で色覚だけに限らず知らなかったことやいろんな考え方に学ぶ

## 3. 野津小学校での実践（2017年度～）

- 8月の職員研修で『出会う本』を紹介
- 少数色覚児童の保護者との健康相談「ママ友に相談した結果『言えない』と判断しました。」
- ほけんだよりで「社会の流れは、違いがあることをマイナスに思わない方向に…」

### 色の見え方は人それぞれ

#### どなたにも、違う色に見えるものはありません。

お父さん、お母さん、またはそれ以上の世代の方、学校の健康診断で「色覚検査」を受けたことがありますか？疾患を見つけても治療することができない等の理由で色覚検査は平成15(2003)年に健康診断から外れたのですが、最近また、必要があれば色覚について相談したり検査したりするようになりました。

色覚検査で色を見分けられない人の割合は、日本人の男性の20人に1人、女性の500人に1人と言われていて、1クラスに1人以上いることになります。案外多いのを目立たないのは、「図工の時周りの人と色使いが違うと言われて、自分は色の見分け方が人と違うんだなあ気が付いたけど、自然と学習するので大人になるまで困ったことはほとんどないかな」という当事者が多く、すぐに困ることの少ないものであることがわかります。

しかし、ある種の進路を選択する時、色覚検査が行われている場合があることも事実です。

ただ、最近の社会の流れは、日本遺伝学会が「色覚障害」という呼び方を「色覚多様性」と改めたように、違いがあることをマイナスに思わない方向に向かっています。また社会全体が「違いに配慮してみんなに優しく、誰にでも使いやすいユニバーサルデザイン化を進めてきています。

学校では、「教職員は色覚について正確な知識を持ち、配慮を行うこと」との通知のもと、野津小でも職員研修で、「カラーユニバーサルデザイン」の考えを取り入れるような話し合いもしています

- ① 大人がよき理解者になること
- ② 色の名まえ当てクイズなど色だけをたよりの質問をしない
- ③ チョークは白と黄色を中心に使う
- ④ グラフやピプスの色使い、理科や図工での配慮をする…等

本日「色覚(色の見え方)について」を配布しています。お読みになって、気になる方は、担任または保健室に連絡ください。あわせて、すでに検査を受けている場合、差し支えなければ、お聞かせください。

「おたよりを見て、うちの子もそうだと思うので」と保健室にいられた保護者は、やはり進路が心配だと言い「でも、今のところ文系に進む希望のようです。検査に関係ない進路をめざしているのでも今は安心」と。

マイナスに思わない方向に社会は進んでいると書きながら、不安を喚起する表現になっている。事実がどうかと伝えるよりも、進路が狭められていることに「おかしいのでは？」と感じる表現にすべきだった。

## ○初めて4年生へ『出会う本』を紹介

課題を抱えるクラス「人それぞれにいろいろな違いがあって、それはすてきなこと」という気持ちを持ってほしいと願い、理由があって保健室で実施。

マンガの登場人物それぞれの配役を決めて読み進めると、子どもから「やっぱりチョークは黄色が見やすいよな」「大学でこんな勉強するんなら自分もやってみよう」とつぶやきが漏れる。普段マンガを読まない子もいたが、その日は絵を追いかけてながら何かを感じているようだった。



## ○2月の新入児入学説明会でカラーユニバーサルデザインについて説明

## ○今年度の研修のスタート

研究主任と相談しながら、子ども向けのユニバーサルデザイン関連の本を図書室に置くことや、授業の板書に使うチョークの色、全体に見やすい色使いについても取り組みをすすめている。

## 4. これから

しきかく学習カラーメイトに参加し『出会う本』をいっしょに作りながら、人権に対する社会のあり方や自分の意識について見つめなおす機会を得た。

それまでも健康診断の中で、色覚に関しては、他の健康診断内容と比べて、説明や事後措置に戸惑うことが多かった。検査結果に優劣が伴うと感じさせてしまうおそれがあるからである。

つまり、誤解や差別の構造がそこにあり、これまでに当事者の選択肢や可能性を狭めたり、不安を抱かせたりしていたのではと思うと、私もまた保健室で差別をつくる側の一人となっていたのだと改めて気づいた。

4年生の子どもにわかるように作った『出会う本』。それを使った保健指導を行ったところ、子どもたちは私の不安をよそにそれぞれの感性でその1冊を受け取った。金魚の話で始まる場面の導入、印象的なカラー印刷の部分に子どもは目が行く。柔軟な感性は、マンガを読みながら色覚について「いろいろな見え方があるんだ」と理解し、「こっちの方が見やすいからこれがいいよね」と見やすさの観点で受け止めていた。出会い方がどれほど大切かを思い知らされた。私が考えていた「難しいのでは？」は杞憂に終わった。

色覚に限らず、違いを個性ととらえたり認め合ったりすることは、意識しておかないと伝わらないし、押し付けるものでもない。いま私は「その違いは大切にされるべき違いだよと言えるようになること」、「少数派が我慢するのではない方法があること」、「それが少数派だけではなく全体にとってもわかりやすい方法にもなること」を子どもたちといっしょに見つけていこうと思っている。